世界英語化の陥穽（1）　トランスナショナル

-入江昭教授論文（『世界』2月号)について１－（『世界』編集部Ｎさんへ）

『世界』二月号の、寺島実郎の「常識に立ち返れ」の言説はその通りだ。ハーバード大学名誉教授の入江昭論文の前半（トランスナショナルな人間になるべきだ）には賛成だが、後半の、トランスナショナルな将来の地球市民を育て上げるための方法には同調できない。彼は各種の世界大学ランキングで、米国の大学が上位を占めていると言い、英語の力を説き、「英語が世界共通語、少なくとも国際教育の面での共通語となっていることは否定できない。日本人としても、よりトランスナショナルな姿勢を培うためには、やはり英語で学習し、英語で他の国の人たちとの交流を促進するようにならなければならないであろう」と述べている。ランキング作成の基準自体、英語の価値観によるものなのだから、こうしたランキング結果は当然のことだ。しかしだからと言って他の国とも英語で交流するようにした方がよいという論は賢明な論理ではない。英米の価値観である英語（の価値観）こそまさに現在の世界の悲惨な状況を創り出したのではないか。朝日新聞が最近おかしくなったのは、主筆に船橋洋一という親米・英語化論者がなったことと関係しているのではないか。

日・英・米の高等教育には授業料という制度（受益者負担）がある一方、フランスをはじめ、EU のほとんどの国では、わずかの登録料だけで学生になることができ、学生は生活面で国の保護をうける。任用のためのかなり難しい資格試験が課される大学教授は、主にこうした学生の教育に力をさき、文系でも理系でも先端的な研究は教育義務のない別の機関で行うのがふつうだ。こうしてひとしなみに「大学」と呼ばれている教育機関の機能は、例えばポワチエ大学、リモージュ大学、サンテチエンヌ大学などといったフランスの授業料のない平均的国立大学と、ハーバードのような年間の授業料が四、五万ドルにのぼる総合私大との間ではかなり異なる。また ENA とかノルマル、ポリテクニクといったエリート養成校は「大学」の範疇ではなく、在校生には給付金が支給される。こうして様々な国や町の事情を反映する「大学」を、ハーバードを頂点とする英語の価値観でランクづけることにどんな意味があるのだろうか。全世界の若者に広く開かれているフランスの大学では現在、中国人学生の流入に悩まされ

ている。フランスに学びに来る中国人の若者にとってフランスの大学は、真剣に勉強するにしろビザを取るだけの口実にしろ、授業料がないというのは大きな魅力なのだ。高等教育を受けるには金を払わねばならないというのが日本を含めた英語圏の現実だが、教育を受けたい者に対しそれを国が無償で保証してやらねばならないというのが EU の姿勢である。世界のほとんどの国で無償である高校の授業料を、「公立高校の授業料は無償にすべきだ」と今ごろ議論しているのが日本である。自己価値を高めると宣伝して外国人を呼び込んでも日本で英語がうまくなるはずはないし、授業料も高いとなれば、いかに日本政府が海外留学生受け入れの積極策を取ってみても、日本（文化）固有の魅力が相当なものでない限り、望ましい結果が得られるはずもない。

明治時代のエリート留学時代と違って現代はかならずしもエリートが留学するわけでなく、留学の目的も多種多様である。ふつうの人が行き他国のふつうの人間、家族と交流する。異文化を体で実感した結果生じるものはある明確な目的をもったエリート留学から生まれるものとは違っている。こうした自然な交流は現在無数に存在し、多くの好ましい結果を生んでいる。こうした人こそ「トランスナショナルな人間」ではないのか。英語教育を期待してフランス留学をする人間はいない。留学した国の知恵と価値観を知るためにはその国の言葉を知る必要がある。英語でフランスの知恵を体得することはできない。

国際政治学者坂本義和がフランス語教師であった私に、フランスではなぜ英語が通じないのかと、そうした状態が不思議であるかのように訊いたことがある。かように進歩的文化人と呼ばれた人でも言語を誤解しているのである。フランス人の多くは当然のことながら世界語としての英語をしゃべらなくてはならないとは思っていない。最近の若いフランス人は英語をたどたどしく話せるようになっているが、それでもなほ英語ではなくフランス語で話しかけられるとあきらかにほっとした顔をする。あたりまえだ。世界的物理学者豊田利幸博士はイタリア語が堪能だった。彼は「イタリア語には英語にない感覚がある」と言ったが、もちろん数学や物理学的問題解決に通じる感覚だけではない。英語だけの世界になったら、真理の世界は狭く痩せこけたものになるだろう。

入江氏は言語を交流の道具としてしか見ていないようだ。言語はそうである以前に用いている人間の価値観をつくっているものであり、価値観そのものである。その言語（価値観）がその人間を社会的に立ち上がらせていると言ってもよい。タイで流暢な英語で話すより、たどたどしくてもタイ語で話しかけた方がはるかに深い内容の交流ができる。これはタイに限らずどこの国でもそうだ。他国に強要したい人権の観念、教示したい正義や自由の理想があるのならアメリカはそれを英語ではなく、昔、外国で布教したカトリックの宣教師のようにその国の言葉を習得し、その言葉を用いて行うべきだ。イスラム圏を教化したい（始終戦争ばかりしている国にそういうことが可能とは思えないが）と思うなら、アラビア語を覚えてからやった方がよい。サウジアラビア、エジプトなどイスラム圏のなかで英語化しつつある国の将来は危うい。英語は一つの言語の持つ自然な地域性を失いつつある言語である。英語をコンピュータ記号として用いるのならまだしも、全世界共通の生活言語とするにはまったく不適である。世界の言語は一元化すべきではない。言語（= 価値観）の多様化と、多様化の維持こそ世界の崩壊防止装置の根本である。登録料はあるが授業料のない EU の大学、手数料はあるが利子制度のないイスラム銀行の慣習を英米日の大学、銀行の慣習に従わせるべき道理はない。

アメリカはすでにテロ戦争に敗北している。死を覚悟した人間の攻撃は、どんな軍事力をもってしても防ぐことはできない。西欧、特にアメリカは、十字軍以前から存在したイスラムのテロ制度を現代に決定的に蘇生させてしまった。

国の防衛とか日米軍事同盟に関する議論は考え直したほうがよい。自爆覚悟のテロリストやテロ国家からの攻撃を軍事力で防ぐことはできない。どんな軍事力でも、どんな軍事再編も、死覚悟の攻撃の抑止力としては無力であることを知るべきだ。国家間の紛争においてさえ、軍事力は古びた、効果の曖昧な手段になりつつある。こうした観点から、入江氏の「トランスナショナルな人間」を育てることは確かに重要だが、これは言語による価値観の一元化によって生まれるものでは決してない。違った言葉を用いる他者こそ愛し、多様性を許容し合わねばならない。この難しい事業こそ人間に課された唯一共通の仕事である。グローバリゼーションが意味を持ちうるのはこの方向だけだ。泥沼は当分続くだろう。しかし近い将来、こうした状態を変える賢い方策がかならず生まれてくる。　　2010 / 01 / 15（仏・リモージュ大学客員）